

浦代峠の乱闘

桧垣七郎

(会員 佐伯市下久部区)

佐伯史談一八七号の「浦代峠」を見て、昔の或る事件を思い出した。

もう六十数年前、たしか私が小学校に上る前の昭和八年か九年頃の事だったように思う。

日常の農作業などの労働はきつく、娯楽の乏しい時代で、集落の青年達が連れ立って花見に行くのは、彼らにとって一年のうちで一番楽しみな行事だった。

当時の浦代峠は桜の名所で、花の季節には遠近の人達が重箱に弁当を詰め、一升壺の酒などを持って、遠い道もいとわずテクテク歩いて行ったものである。

わが集落からも、青年達が浮き浮きした気分で浦代峠に向かった。一行の中に、私方のT兄とそのすぐ下のS

兄も居た。

その日にT兄が着ていた服は、長兄が東京で仕立てた茶系統の地に細い縦縞の入ったモダンな背広だった。

長兄が東京でこの背広を着て歩いていたところ、他の暴力団の幹部と間違えられたらしく、やくざの一団に囲まれた。学生時代から水泳が得意で自信があり豪胆な長兄は、堀端で背水の陣を布いた。相手がかかかってきたら堀に叩き込んで水の中で決着をつけてやろうと身構えて睨み合った末、長兄の気迫に押されてやくざの方が退散したという曰く付きの背広である。

さて、青年達が浦代峠での楽しい花見で一杯飲んでいい気分になり、一升壺など抱えて花の下をブラブラ歩きしていたところ、花見客の中に大分方面からハイヤーに乗って来た金持ちらしい一団が居た。

当時はまだ自動車が珍しい時代で、よく手入れの行き届いた綺麗な車は、子供だけではなく大人でさえ触つてみたくなるような誘惑があった。運転手は車を宝物のように、いつもピカピカに磨き、走って埃がつけばすぐに鳥の羽毛のハタキで掃除するなどして大事にしていた。汚れた手で撫でまわされるのは何よりも嫌うことで

ある。

村の青年達が車のまわりに集まって、物珍らしげに車を触るのを嫌った運転手が、横柄な態度で「田舎者が――」というような蔑みをこめて「触るな」と注意したらしい。

同行していた、満州事変に出征し戦闘で敵兵を殺した経験のあるYおいさんが運転手の言葉に怒り、酒の勢いも手伝って、持っていた一升壺で頭を撲り割れた壺の鋭い切先を首に向けて突き出した。危うくそれをかわした運転手は、Yおいさんには向わずに一行の中に居たT兄の胸ぐらを掴み「来い、警察に連れて行く」と言って引き立てようとした。

青年達の中で、垢抜けのした背広を着て、背の高い一見役者のような優男（ぶよう）（本当ですよ）のT兄が一番弱そうに見え、こいつなら御しやす（おん）いと考えたらしい。

少年時代から「修武館」(馬場通りにあつた矢野公先生の柔道場)に通い、当時すでに有段者だつたT兄である。運転手に胸ぐらをとられた姿勢は、まさに柔道の乱取りの型どおり、お誂え向きの態勢である。次の瞬間、T兄の見事な背負い投げがかかり、運転手は宙を舞って投

げ飛ばされた。そのあざやかに、ハイヤーの乗客のおじさんが「やったのう!!」と感嘆の声を上げた。

起き上がってきた運転手を、今度は後からS兄がそこらにあつた丸太でボカボカツと撲って知らんぷり。状態不利とみた運転手は、車に積んでいた短刀を持ち出して来た。彼はやはりヤーさん系の男だったのである。

短刀を持ち出されては事は面倒、S兄は孫子の兵法「敵の鋭鋒は避けるべし。三十六計逃ぐるに如かず」とばかり「T兄逃げようや」と二人でスタコラサッサと逃げて難を避けた。

後日この乱闘が話題となり、地方新聞が「浦代峠の乱闘」と題し、「柔道の猛者が――」とその活劇ぶりを報道したそうである。

現場で、青ざめて事の成り行きを息をひそめて見守っていた村の青年達も、後で「俺達も何か腕に覚えの武技を身につけんといけんのう」と話し合った。

それからしばらく後に、T兄が柔道の昇段試験のため大分の武徳殿に行った時、大分駅でその運転手の姿を見かけ、隠れるようにして通つたとのこと。「喧嘩などするもんじゃない。いつどこで相手に会うかわからん。世

間が狭くなる」と述懐していた。

丁兄の若き日の武勇伝である。

なお、この兄は子供の時から相撲も強く、素人相撲の盛んだった青年時代には、柔道のかたわら津久見の赤八幡社や近郷の宮相撲などにも出場して活躍し、素人相撲の間では少しは名を知られた存在だった。

また、力も人一倍強く、二俵米(玄米六十kg入りの俵二つを縄で束ねたもの)をひよいと肩に担ぐ力持ちだった。或る時、小屋の門をはずして外に飛び出し、頭を下げ向って来る暴れ牛の前に立ちはだかり、両手で角を握って前足に足払いかけて転がすなど、牡牛と素手で格闘、スペインの闘牛士顔負けのような技を演じたこともある。

誰よりも頑健で力強く、不死身のようで頼もしく、アラギ派に属する歌人でもあった兄も現在八十五歳、寄る年波と事故のため体が不自由である。

「話しつつ びいと力なく尻を放りぬ ああわが兄もかく老いたるか」
(下品な歌をお許し下さい)

畑野浦峠

佐伯市大字木立大中尾と蒲江町畑野浦地区との境界にある峠。標高約四〇〇m。西方一、五kmに石草峯(五七九・七m)、北東三kmに元越山(五八一・五m)がある。その鞍部(四一〇m)の下、標高一五〇m位のところを国道三八八号(延岡佐伯線)がトンネルで通じている。新トンネルは昭和五十二年(一九七七)に完成。延長九四三m、幅員八m。

畑野浦峠は以前から、佐伯と蒲江町入津湾沿岸をつなぐ重要な道だった。しかし、自動車が通れるようになって、それはたいへんな難所だった。カーブは大きいものだけでも約三十カ所。小カーブを含めるとおびただしいもので、そのうえ狭いため運転者は路肩から目を離せず、ガタガタ道で絶えずハンドルを右に左にきつたものである。この旧道は大正十一年(一九二二)に開通したものの。

佐伯藩幕末の詩人・明石秋室は、郡代町奉行として領内巡視の際、畑野浦峠の絶景に驚嘆し、詠んだ漢詩の「入津坂文学碑」が時にある。

入津坂 明石秋室

欲下入津雲坂長 俄驚氣候麥炎涼

横空一嶺界南北 北麥青々南麥黃

(入津に下らんと欲して雲坂(高い坂道)長し、俄かに驚く氣候

炎涼(暑いと涼しい)を變ずると。

空に横たう一嶺は南北を界し北は麥青々(青々)南は麥黃なり)。

(蒲江町誌)「畑野浦峠」(「大分合同新聞」昭和五十三年二月六日版)